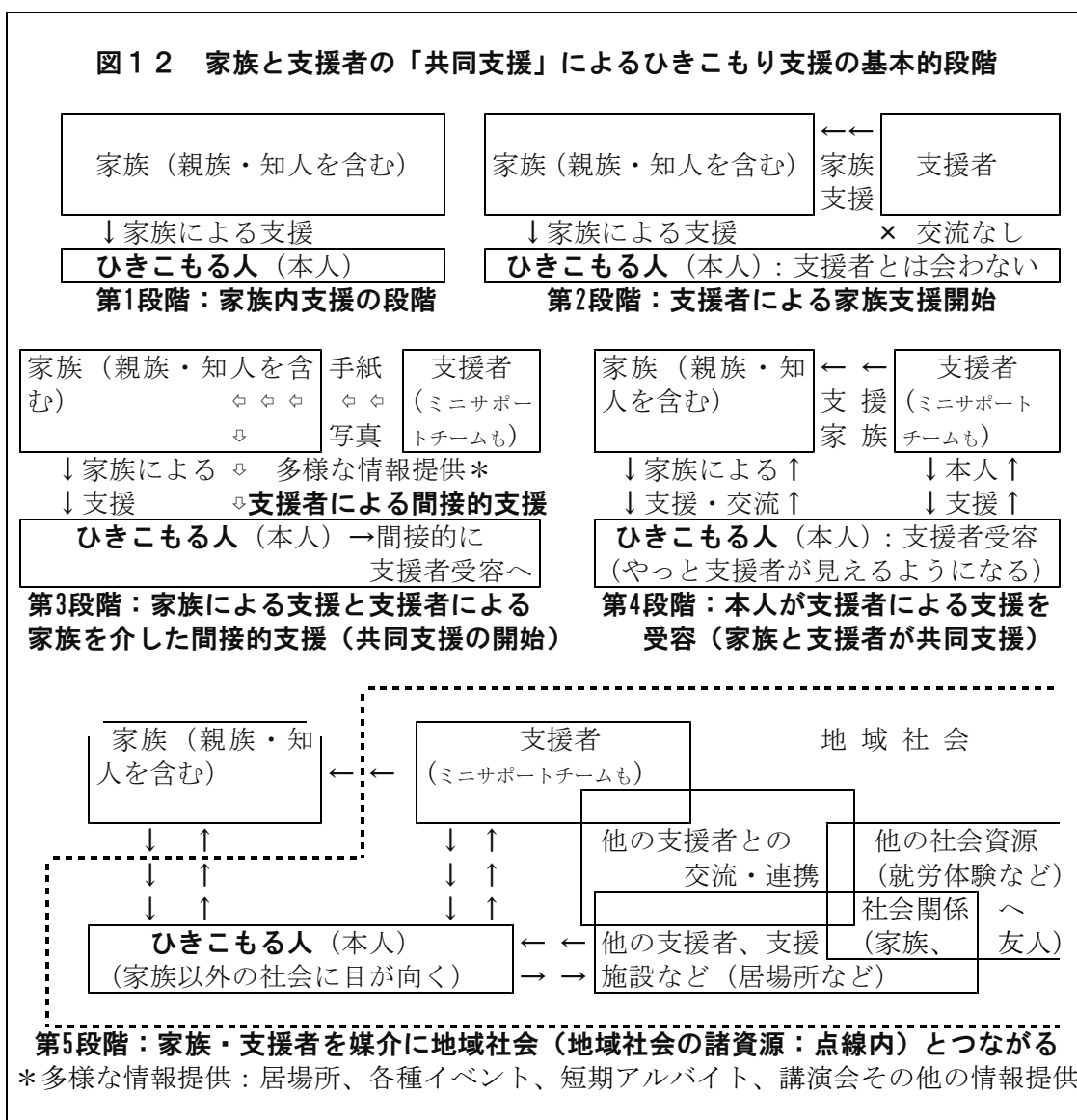


図12 家族と支援者の「共同支援」によるひきこもり支援の基本的段階



2) ひきこもりの地域支援ネットワークの発展

ひきこもりの地域支援ネットワークは、実情をふまえていくつかの段階区分ができる。

図13は便宜的に4つの段階に分けて表現したものである。なお、社会資源は例示である。

①段階：支援機関・団体孤立の段階：支援機関と当事者が個別に契約をして支援関係を結ぶ。支援は偶然の条件に左右されやすい。

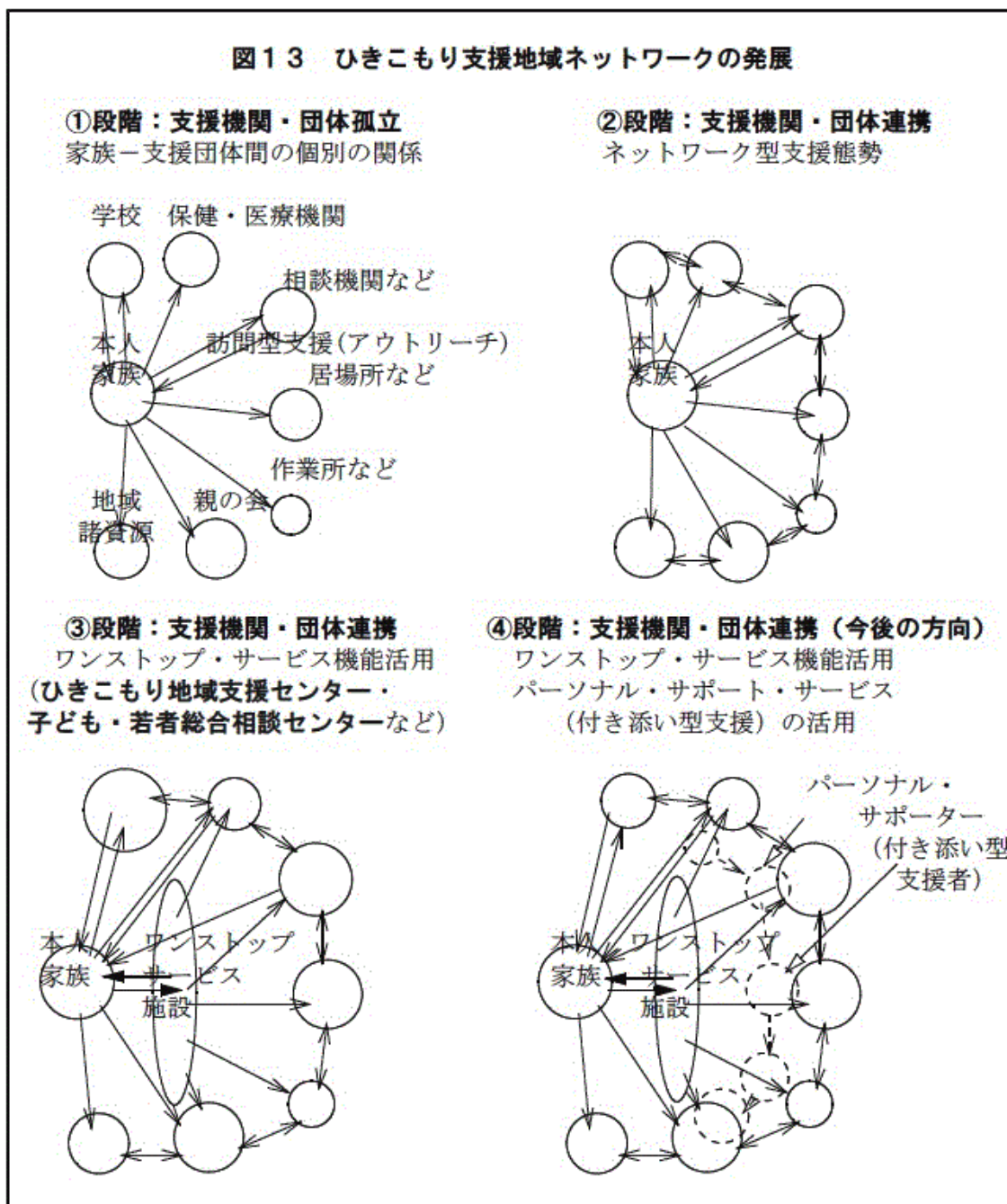
②段階：支援機関・団体連携の段階：支援機関が連携しているので、共同の支援、支援の交代などができやすい。しかし、当事者が最初にどの支援機関にアプローチするかによって影響されやすい。

③段階：支援機関・団体連携の段階・ワンストップ・サービス機能活用段階：支援者と支援施設の個別の関係だけでなく、ワンストップ・サービスが可能な施設（厚生労働省の事業では、ひきこもり地域支援センター、子ども・若者育成支援推進法では、子ども・若者総合相談センター）により、適切な支援機関あるいは支援機関の組み合わせが実現しやすい。今後は、ワンストップ・サービスの充実が期待される。

④段階：パーソナル・サポート・サービスの制度化ないしは活用段階（近未来）：内閣府は、緊急雇用対策の一環として、パーソナル・サポート・サービス（人によるワンスト

ップ・サービス) をモデル・プロジェクトとして各地で実施してきた(内閣府：2010a、2010b、パーソナル・サポート・サービス検討委員会：2010 他参照)。この事業は、2013年3月で終了したが、条件のある自治体などでは継続実施されている。

*現実には、ひきこもりの地域支援ネットワークには、各地域の実情に応じて以上の諸段階があるが、特に長期・年長のひきこもり支援においては、多様な社会資源の柔軟な活用、長期にわたって支援の継続ができる支援体制が必要となる。そのためには、支援機関の連係とパーソナル・サポート・サービスのような付き添い型(伴走型・よりそい型)の長期支援体制が必要であり、ひきこもり地域支援ネットワークの成熟が期待される。



3) ひきこもりの多様相支援(複合レベル支援)の考え方

ソーシャルワーク実践において、支援の対象者・支援領域の視点から、ミクロレベル実践(小領域)、メゾレベル実践(中領域)、マクロレベル実践(大領域)が区別されるこ

とがあるマイクロレベルの対象は、個人・家族・小集団などへの支援、メゾレベルは、地域住民組織・学校や職場などのやや大きなグループへの支援・社会福祉機関の管理運営など、マクロレベルは、地域の諸組織・国の政策・組織・政治などに取り組むことを指している（以上主として、秋元美世他：2003、岡本民夫他：2004などを参照してまとめた。このような領域論には、当事者に間接的に影響する集団関係などを意味するエクソ・システムを区分する考え方もある。ブロンフェンブレンナー：1996、黒木保博他：2002）。

今この考え方をやや自由に解釈し、「ひきこもり支援」に取り入れてみる。ここで、ひきこもり支援や取り組みあるいは考察の対象領域を、**マイクロレベル**：基本的にはひきこもる人・親・その他の家族構成員など、**メゾレベル**：地域の支援関係諸組織・支援団体・市町村などの基礎自治体およびこれらの連携やネットワークなど、**マクロレベル**は、都道府県や国の政策、日本社会の教育や労働政策や現状、社会文化の歴史的状況・思想および現状など、と考える。

通常、ひきこもり支援者は、マイクロレベルから実践を開始することが多いが、多くの支援者はそこにとどまらず、メゾレベルの実践（例えば地域の支援ネットワークの形成・改善など）に踏み込むことになる。また、メゾレベルに踏み込んだ支援者のある部分は、さらに都道府県の政策や国の政策や立法などに向けた取り組みに踏み込むであろう。マクロレベルの実践には、いわゆる社会運動的な手法だけではなく、ひきこもりの社会文化的背景を考察し、自らの実践の指針としたりひきこもり支援実践を深め、見直し、広げる知見を得ることも含まれる。ある支援者は、マイクロレベル実践が大部分で一部メゾレベル、別の支援者は、メゾレベルの実践を中心に一部マクロレベルに踏みこむかも知れない。支援者集団という視点に立てば、現実には、マイクロ・メゾ・マクロレベルの実践が各地で展開されていると言えよう。またそうであることが求められているとも言える。筆者は、ひきこもり支援において、各支援者が、どのレベルの実践をおもに行っているかの違いを超えて、常に3つのレベルのことを考えながら、自らの実践を振り返り、検討し、構築する視点が必要であると思う。支援事例の必要に応じて、マイクロレベル中心の支援からメゾレベルの支援に軸足を移動させることもあり得るであろう。これらのことを**複合的なレベルにおけるひきこもり支援とそれらの統合**ということもできる。ひきこもる人、特に長期・年長のひきこもる人（およびその家族など）の支援においては、複合した問題に直面することが多く、3つのレベルの全てを含む総合的な取り組みがないと容易に問題は解決しないのではなかろうかという思いもある。

このように、3つのレベルは、（支援者集団の営為という意味では）実践において別々にあるのではなく、相互に関連づけられ、交流し、統合されることが望ましいと思う。

9 長期・年長のひきこもる人の創作事例

ここで提示する2事例は、いずれも本報告の理解を具体化するために、実際の長期・年長のひきこもり事例からヒントを得て創作した事例である。**創作事例1**は、家族間葛藤の緩和に取り組みつつ、本人の安心のためライフプランの支援（経済的保障の実現）に進んだ事例である。支援関係は形成できたものの社会生活への復帰（特に就労）については、ようやくゆっくりと歩み始めたばかりである。**創作事例2**は、長い年月のほぼ完全なひきこもりと支援拒否のため、直接的な本人支援は実現しておらず、家族支援にとどまっている。活用できる支援手法が乏しく、将来の暮らし方が描けない状態の女性である。可能な支援手法を駆使しつつも、長期支援の必要性を予想している。

【創作事例1】Fさん(男性) (40代前半)：高校進学後、不登校状態となった。心配して登校を迫った両親に対して家庭内暴力で応じた。暴力はエスカレートし、弟妹にも及んだ。その後、何とか高校を卒業し、大学に進学したが、大学生活になじめなかったようで、間もなく、ひきこもるようになり、大学を中退した。

近年再びFさんと両親の争いが日常化し、弟妹ともお互い口をきかない関係で、「にっちもさっちも行かない状況」となり、外部に援助を求めた。それが支援者との出会いである。支援者が、気長に呼びかけた末に、2年が過ぎた頃になって相談室面接が実現した。